

波田永実先生を送る

植村 秀樹

二〇〇一年四月、法学部開設と同時に赴任された波田永実先生と私とは、二十年余りにわたって、同じ学部同じ学科の同僚であり、また、ある学会で理事として一緒に働く機会を得た。発足当初の法学部は、私を含め他学部から移った教員と波田先生のように新たに着任された先生方とで成り立っていたが、後者の方が多数であった。さまざまな経歴をお持ちの多彩な先生方の集まりであったが、事前にいただいた教員名簿にあった「波田永実」という名は、以前にどこかで見かけたような気がしていた。先生の論文を読んだというような確かな記憶はなかったのだが、決してよくある名前というわけではないので、記憶のどこかに残っていたのであろう。

さて、新設の法学部では、初代の入試担当の学部運営委員を拝命した。当時の法学部教授会は、二人の運

営委員が交代で議事進行を担当していたが、これがなかなか容易ならざるものであった。新設学部なので協議すべきことが多かったのは当然であったが、その結果、教授会ではさまざまな意見が飛び交うことになった。

事前に初代学部長の東寿太郎先生（国際法専攻、元津田塾大学副学長）を中心に運営委員会で検討の上、準備をして臨んだものの、目論んでいたようには議論は進まず、結論（議決）を得るのは容易なことではなかったということである。どの議題も簡単に「異議なし」で終わることはほとんどなく、さまざまな方向から意見が飛び交い、議論は熱を帯びることがしばしばであった。教授会終了時に、「長い教授会だったなあ」と、議論を長引かせることに大いに「貢献」した当の本人がため息をつくといったことも一再ではなかった。

こうなると、もうおわかりであろう、波田先生も積極的に発言されたひとりであり、当時の執行部にとつては少々手ごわい「論客」のひとりでもあった。波田先生も含め、「ご意見はごもつとも」と思うことが多かったので、教授会がしばしば長くなることがあったとしても、それは仕方のないことであつた。「雨降つて地面まる」というが、議論を尽くして法学部の基礎が固まつたのである。十分に論議を尽くした上での結論であれば、誰もが納得できる。本学はそれだけ自由な大学であつた——今も、そしてこれからもそうであることを願っている——ということでもある。しばしば長引くことのあつた当時の教授会もまた、新設学部をどうしていくか、教員が真剣に考えていたからこそであつた。

ところで、どこかで見かけたような気がしていた「波田永実」の謎はほどなく解けた。自宅の書齋——という名の物置——を整理していたところ、岩波新書の共著者としてその名を背表紙に見つけた。『遺族と戦後』（一九九五年）というその本が買ったのは、おそらくは著者のひとりである田中伸尚に惹かれたからであつたと思う。新聞社を途中退社してフリーに転じた——私自身、もともとジャーナリスト志望であつた——田中に当時の私に関心を持っていたからである。そして、日本政治思想史専攻の波田先生にとつて、このテー

マは重要なものであった。先生は第四章「遺族と政治」を担当されたが、これが十年後の論文「遺族運動の形成と展開」(『岩波講座・アジア太平洋戦争』第二巻所収)へとつながっている。その後はさらに研究の範囲を広げ、時に近代以前にまで考察が及んだことは、法学部紀要『流経法学』をご覧いただければ一目瞭然である。退職の直前に開かれた先生を囲む懇談会の場において、先生の研究遍歴——過去・現在、そして未来についても——を詳しくお聞きする機会があった。知的刺激に富むたいへん興味深いものであった。出席された同僚諸氏は皆、同意してくれるであろう。

このように多彩な研究活動を繰り広げる一方、大学では学生部長、学部長等の要職を歴任された波田先生であるが、そこらは先生の経歴をご覧いただくとして、波田先生を語るうえでどうしても避けて通れない——私にとつても思い出深い——のは、やはり酒である。法学部開設から間もない頃、どんな酒が好きかと先生から尋ねられた。ウイスキー好きの私は、「強い酒を少し飲む」と答えた。その頃は——今もそうだが——シングル・モルト・ウイスキーをストレートで飲むのがもっぱらであった。先生は、と問うと「俺は強い酒をたくさん飲むのが好きだ」という返答が返ってきた。懇親会の席などでビールをチェイサーに蒸留酒(焼酎やウイスキーなど)を飲まれる姿を見て納得した。バーボンがお好きとうかがったこともあったが、クライヌリッシュなどのスコッチもよく飲まれるようである。(酒好きの人限定の話になって恐縮だが、私が思うに、クライヌリッシュは、フルーティで繊細な香りがその特徴である。実は——とっては失礼だが——先生はかなり繊細な方なのである。酒は嘘をつかない。因みに私はというと、先生とは対照的に、アードベッグやラガヴェリンといったピートの効いたアイラ島のシングル・モルト派である。さらについていうと、チャールズ英国王が愛飲されているのも同島産のくせの強いラフロイグだそうである。)

このような酒好きの波田先生が二〇〇七年から二〇〇八年にかけてロンドンで過ごすこととなった。酒と無

縁のはずはない。ロンドン大学歴史研究所で一年間にわたり研究生活を送られたわけであるが、この在外研究が先生の研究の幅をさらに広げることになった。その成果は紀要『流経法学』にも発表されているが、ロンдонとくればやはりパブである。波田先生の特技と呼んでも差し支えないのではないかと思うのは、研究と趣味とをうまく結びつけることである。「趣味と実益を兼ねる」というが、先生の場合は趣味と研究とが結びつく。終日、歴史資料と格闘された後は、当然のようにその足はパブに向かうことが多かったであろう。パブについてのエッセイを大学の広報誌『RKU Today』に連載されたことがある。前書きには「パブを知ることにはイギリスをよりよく知ることにつながる」とある。歴史の知識と新たな観察とを組み合わせて、面白く楽しく、そしてなかなか深い考察を披露されている。酒を嗜みつつ、同時に知的好奇心のアンテナが稼働していたわけである。そこにお書きになっていくように、ロンドンのパブで飲まれているのは、もっぱらビール、それも「エール」と呼ばれる上面発酵で炭酸の弱いタイプのものが中心である。日本でなじみ深いピルスナー・タイプ（ラガーとも呼ばれる）はあまり見かけない。さらにいえば、スコッチ・ウイスキーもあまり飲まれないのである。エールをたっぷり流し込んで研究で疲れた体を癒しつつ、街と人を観察し、さらにはパブの看板へと考察は進む。パブの看板や名称からロンドンの歴史と文化の一端を見て取るわけである。趣味と研究はこうして往還しつつ、螺旋を描くようにして——おそらくは、しばしば酩酊しつつ——理解は深まっていったというわけである。

このような波田先生の知的好奇心は、退職後も一向に衰えを知らない。これからも健康に留意され、末永く研究と趣味の両方を楽しまれることを願って已まない。